アウトリーチをご存じですか？

――地すべり学会シンポジウムからの提言――

パネルディスカッションのようす(左端が池谷理事長)

アウトリーチ（outreach）。この言葉は、砂防の分野ではまだあまりなじみのない言葉ではないかと思われます。その意味は、「手を伸ばすこと」「（地域社会への）奉仕〔援助、福祉〕活動；（公的機関や奉仕団体の）現場出張サービス」★1とされています。

アウトリーチは、社会福祉の分野でクライアントに表明されないニーズ把握の手法として開発されたものでありますが、社会福祉以外の分野でも用いられています。たとえば、芸術文化におけるアウトリーチは、芸術家（芸術団体ないし文化施設）が、普段、芸術文化に触れる機会のない市民に対して、（その生活の場に出向いていって）働きかけを行うもので、「芸術普及活動」あるいは「教育普及活動」と言われているものです。★2

また、研究者によるアウトリーチ活動では、研究者と国民との双方向コミュニケーションに資するような活動（たとえば、研究者による国民への直接の教育・指導、研究者と国民との対話等）であり、広義では一方向の情報発信が主と考えられる広報活動（たとえば、パンフレットや映像資料の配布、ホームページ等）も含まれていると言えます。★3

平成19年6月6日、大阪建設交流館・グリーンホールにおいて、社団法人日本地すべり学会関西支部シンポジウムが「地すべり防災・減災におけるアウトリーチ」をテーマに開催されました。

このシンポジウムで、当センターの池谷理事長が「防災専門家もアウトリーチの時代」と題して特別講演をしました。特別講演で池谷理事長は、防災とくに土砂災害の分野におけるアウトリーチを、土砂災害は人命に深くかかわるものであることから、「命を守るために、住民が自分で判断し、行動できるように防災情報の共有化を支援するもの」と定義しました。とくに、土砂災害に関する防災情報は、その多くが行政から出されることに言及し、それらの防災情報が十分に住民一人ひとりに共有されるようにすることが大切であり、その意味では、アウトリーチとは行政から出される幅広い防災情報をそしゃくし、わかりやすく住民に理解してもらうとともに必要な情報を補足する手法であるとも論じました。

また、平成15年7月20日に発生した水俣土石流災害を事例に、避難指示などの情報が住民に届かない場合も含めて、住民自身で判断し行動できるようにすることが大切であると述べました。そのためには、行政からの説明責任や防災対策の実施に加え、これを補完するための防災専門家のアウトリーチが必要不可欠であると論じました。

特別講演のあと、アウトリーチをテーマに5題の話題提供（「中越地震による地すべり多発災害における官学連携」丸井英明新潟大学教授、「災害報道と住民の反応」山中茂樹関西学院大学教授、「住民参加型防災活動の現状と課題」牛山素行岩手県立大学准教授、「減災と市民活動～阪神・淡路大震災から12年目を迎えて」菅磨志保大阪大学特任講師、「官民連携における防災アウトリーチ活動」千葉達郎氏・アジア航測株式会社)があり、最後にパネルディスカッション（司会：沖村孝神戸大学教授）が行われました。★4

アカウンタビリティー（accountability）とは、「（説明の）責任」「成績責任：生徒の成績によって学校の予算や教師の給料が左右される方式」★1、「元来はアメリカにおいて1960年代-1970年代に政府のような公共機関が税金の出資者でかつ主権者である国民などに会計上の公金の使用説明について生まれた考え方」★5などとされています。アカウンタビリティーという言葉は、今では砂防の分野でも広く浸透しており、具体的な取り組みが多方面でなされています。砂防の分野においても土砂災害から人命を守るために、アウトリーチが必要不可欠であります。そこで今後はアウトリーチという言葉とその手法について、議論と取り組みが積み重ねられることで理解が進み、土砂災害の防止・軽減の手法として活用されていくことを願っています。

（斜面保全部・向井 啓司）

★参考文献

1　プログレッシブ英和中辞典　小学館
2　的場康子：アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察ライフデザインレポート2003年2月（第一生命経済研究所）
3　篠崎剛史：研究者によるアウトリーチ活動の効率的な推進にむけてMRI TODAY 2005.10.04(三菱総合研究所)
4　地すべり防災・減災におけるアウトリーチ社団法人日本地すべり学会関西支部シンポジウム（平成19年6月6日）
5　説明責任：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（http://ja.wikipedia.org/）